奬学啓蒙
青海波

書海波

昌子美

孝博流

四方の春

EX-LIBRIS:

小西藏書
NO.
581

青海波

A

Mon Mari Bien-aimé

青海波

與謝野晶子

美くしく黄金を塗れる塔に居て十とせさめざる夢の人われ

二

○紅き絹二つに切りて分つとき戀のやうにもものの悲しき

山の烏掛巣が啼けば天竺の破羅門の顔おもほゆるかな

△のよしあしは後の岸の人にとへわれは颶風にのりて遊べり

ひたひたと身を投げかけて思ふらく蛇の心のわれにあらはる

六枚の障子の破目あちこちに人の覗ける山さくら花

黄なる蝶我をめぐりてつと去りぬものゝみ書
くをうしと見にけん

菊の助きくの模様のふり袖の肩脱がぬまに幕
となれかし

○あさましき素肌の少女見るごとき貝のからか
なましろけれども

うとましや紛るることの日に多く戀も妬みも
姿きまらず

この年の春より夏へかはる時病ののちのおち
髪ぞする

わり竹に紅紙はれる舞あふぎ猿の振る日も涙
こぼれぬ

水無月の青き空よりこぼれたる日の種に咲く

日まはりの花

わが逢はむ男の數を語れよとたはぶれつれば

相人は逃ぐ

またよそに目うつるまじとたのみしも神代のことゝなりにけるかな

にほはしさおよそ少女の心ほどみたせる瑠璃の花瓶もて來

梢より音して落つる朴の花白く夜明くるこゝちこそすれ

二十をば七八つこせし放埒の弟が穿くひだなき袴

過去未來云ひもて行けば虚無ながら念をし掛
くれこの君のため

君が門まへになしたる青き道わが歩むとき秋
の風吹く

十年前まだすなほなる風俗のわが里に來し獅
子の息子よ

○くれなゐの海髪の房するすると指をすべりぬ
春の夜の月

○初夏の楓の枝に藤ちれば花笠に似てなまめか
しけれ

水いろの麻のしとねにあけがたのいたづら臥
の手も指も冷ゆ

かたはらへやはらかに倚りもの思ふこのおも
むきの中に死ぬべき

わが宿世浮木に身をばくくられて捨てられに
けん流れ來にけん

秋の朝黍の木などの白き根を出すここちに寒
き瓜先

兎の繪魚の繪描きて永き日を子に見すること
ややあぢきなし

○ふるさとの幼なじみを思ひ出し泣くもよかろ
と來る來るとんぼ

○やはらかに心の濡るる三月の雪解の日より紫
を着る

西大寺など云ふ寺の大門に今立つ如しよき入日かな

一二

○こゝちよく橄欖色の透きとほり身に流れ入る
すゞらんの花

戀もせじ人の恨みは負はじなど唯事として思ひし昔

夕立のしぶき吹きこむ歌舞伎座の廊下に語る
杵屋のおろく

紅き點金の點をば日をおきて打ちに行くなり
しろき心に

○千葉の海干潟の砂につばくらの影して遠き山
のはれゆく（以下十二首上總下總は遊びて）

葉積みて新造船の腹を繞く街のうしろのほの
ぐらき川

中空に人のましろき背に似たる燈臺見ねし松
原の道

岩鼻の燈臺を見る何となく今死の苦よりのが
れし如く

○岩のくぼ濱豌豆の花咲きぬ久方の雲おちちれ
るごと

芍藥の花より艶にあかばみぬ雨のはれ行く刀
根の川口

黒き家灯のともる時旅人は涙こぼしぬ川のこ
なたに

刀根の川さゝ濁りして初夏の日のくれ行けば
船の笛鳴る

川口の初夏の雨はなやぎぬ對岸の灯と戀をす
るごと

眞菰伏すかぜにまじりてはしきやし香取の宮
の大神はある

たはぶれに青き眞菰の葉を組める指ちかく來
る川あきつかな

かきつばた香取の神の津の宮の宿屋に上る板
の假橋

無くもがな世の亡ぶ日も氣のふれし母をわが
子の目に映す日も

何となくよりどころなく思ふ日の三日四日あ
りて衰へしかな

絶間なくそのかみの夢見ることを何にもまし
て哀れがりける

みなぐさめ三たびきけども知らぬごと涙なが
すは死ぬべき性ぞ

青き蘆人をおほひて伸びたりと蚊帳を眺むる
明方のわれ

○椿踏む思へるところある如く大き音たておつ
る憎さに

消息の往來やがてふつと絶ゆ人間の子は知ら
ずその外

初秋は王の書廊に立つごとし木にも花にも金粉を塗る

かたはらに源氏の君のそひぶしてあるを親見しいつぞやのこと

大いなる欝金のひと葉日に透きて散る時われも舞はまほしけれ

竹杖を地に横たへて額づける乞食を隔て砂風ぞ吹く

たやすげに死なんと誓ふ若人もありのすさびに哀れとぞ思ふ

七つの子かたはらに來てわが歌をすこしづつ讀む春の夕ぐれ

水色に塗りたる如き大ぞらと白き野菊のつづく路かな

ことごとく因縁和合なしつると思へる家もときに寂しき

誰が見ても戀しくなれと云ふやうに若衆かづらを君被く時

振袖の從妹と伯母とにぎはしく送られて來て序の幕あきぬ

わが戀のめでたきことを思ふ時おつる涙の焔のしづく

戀人を遠きにやるはうけれどものの思ひをばならはんわれも

男行くわれ捨てゝ行く巴里へ行く悲しむ如く
かなしまぬ如く

海こゐて君さびしくも遊ぶらん逐はるる如く
逃るる如く

秋の草みなしろがねの竹に似ぬ野分の通るむ
さし野の原

初戀の日よりつづきてめざましき心の如き紅
蜀葵かな

はかなしや天女の髪も秋くれば落つと云ふな
りわがひとり言

うすぐもり青き八つ手の濡れたるがここちわ
ろき日三日四日となる

たをやかに笑ふ女の絲切歯しろく尖りて涼し
さの湧く

雨を吹く隙間の風にあぢきなく濡れて戰げる
蚊帳の裾かな

○見て足らず取れども足らずわが戀は失ひて後
思ひ知るらん

きちがひか繼子ごころか情てふものにことご
とうらかくごとし

わが取れる紗の燈籠に草いろの袖をひろげて
來る蟷螂

七八とせ京大阪を見ずなりぬ遠き島にも住ま
なくにわれ

猪と鼠立ちて歩める繪の狀に春が伴れくる田
舍人かな

さくら散るわが來し方と共に散る涙とともに
雨まじり散る

花引きて一たび嗅げばおとろへぬ少女ごころ
の月見草かな

ものの列來るを見れば横ぎりぬそのことをい
と派手に思ひて

東京に雪雲くれば遠方をふたがるごと急ぎ
文かく

わが太郎色鉛筆の短きを二つ三つ持ち雪を見
るかな

光明を恐れてすなるすさびとも眠れる人を思
ふなるらん

あめつちの中にただよふ悲しみをわがものと
して親しむ夕

君と居て百とせなほも憂へずとささやくは誰
石の湯槽に

眉引かず香油を塗らぬ素肌をばめでたく映す
掛鏡かな

湯槽にてわが枕する腕は望の月夜も及ばぬも
のを

夢いまだ多きが如し春の湯にうつりて匂ふ我
のまなざし

われは猶博士の庫の書よりも己を愛でゝ黒髪
を梳く

たそがれの光もわれの身に添へば悲しきばか
りめでたかりけれ

みづからを愛でんと我は白鳥に身をば假れる
や春の湯の海

しら鳥の背を隠さんと水色の帳を引けば青空
に似る

この白き胸を自ら刺し通す狂亂の日のありや
あらずや

山川に踵をひたす夏のごと石だたみをば水の
ながるる

たはぶれに眉をひそめぬ自らの素肌を抱く寒き女と

夜の色ともしびの色湯の靄によき襞つくる愁をつくる

悔むべき戀もなき身に何事ぞ湯槽にかくれ涙あらふは

粉黛のこちたきことを厭ふ人泉の如く湯を好むわれ

木の下に落ちて青める白椿われの湯浴に耳をかたぶく

湯槽をば水晶宮になぞらへぬありて耻なき身の清らさに

かたはらに睡蓮咲くと誰云ふや湯槽に浮ぶわれの圓肩

森に似る青き板壁つや好くも靜かにうつす燭と素肌と

ふくよかに身の若きこそめでたけれ薔薇をもつまじ棘の傷めん

湯を出し眞白き魚の吹きよりぬ玻璃の器の金蓮の花

ほのじろき靄の中なるうまごやし人踏むころのあけがたの夢

三尺の柳を折れば大馬に春は女ものらまほしけれ

白き墓いつにてもあれ安らかに寢に行くを得
る床とおもひぬ

大いなる支那の地圖をば擴げ見る男の傍に白
蠟を焚く

舞姫のおしろいするも寒からん京の秋かぜ川
よりぞ吹く

少女の日あたり近くもよせざりしそのあやか
しの友となりにき

色白のおしゆんが刈れる萱の葉の光るも涼し
馬の背より

生來の二重の心二やうに事を分ぐるがここち
よきかな

何ごとか病める蠶の冷たさに胸薄じろくくも
る夕ぐれ

わかき友さかづきを見て何泣ける破れし戀と
酒と似たるや

つれなくも物思ふ間にたけのびて惡しき匂ひ
を立つる雜草

左右より胡蝶の羽を背に負へる子役のいでて
笛ひゆうと鳴る

雪積もる深夜の街の道具立よこにまはりて君
ちらと見ゆ

いづこへか逃れんとして逃れ得ぬ重きここち
に大ぞらを見る

悲しとは足らへる際に云ふことぞ與り知らず
目の外の人

四二

彼の人を暫くわれの憎みしは暫くわれや戀し
たりけん

短命はすでに知りたる人と云ふおのれともな
くめでぬ鏡を

薔薇咲くしろくはた黄にうす紅に刑の重きは
墨色に咲く

影の國黑き氷を出できたりわれをば掩ふ蝙蝠
の翅

門に干す刈草の葉にまじりたる釣鐘草もかな
しかりけれ

刈草の青白きをば嗅ぐ如くわれを思ふや三十路してのち

水盤に紅おとすよりあてやかに早くひるごる星月夜かな

甘き味ほのかに殘り憎からぬわれの醉ひざめ君の醉ひざめ

やうやくに思ひあたれる事ありや斯くものをとふ秋の夕風

玻璃を滴る花ゑんどうの柔かき綠のしづく臙脂のしづく

黴にほふ衣桁の衣を被くとき雨を憎みぬ繼母の如

われすでにあたはずと云ひ人々に一尺すさり
ものをこそ思へ

砂に居る鴫の如くに額たれて人言のみを聞く
ははかなし

皐月來ぬうす黄の棕梠の花落ちて池の濁れる
旅の宿かな

秋來ぬと白き障子のたてられぬ太鼓うつ子の
部屋も書齋も

見るところ世を樂むに似たれども悲しきこと
を背後にぞする

この君かさも類なくきたりし人はと云ひて
知らぬ子の泣く

霰より早く羽より輕やかに心をわたる淡きかなしみ

なほさめぬ夢の女とささめきてわれを見返るこのも彼のもに

あらましは君に染まりぬわが心うらなつかしきものとしる頃

人ごみのうしろに低く瓜だてて若き俳優に花なぐるかな

近き家いと悲しげにこちたくも香焚く日なりうぐひすの聲

びろうどの薄青色の机かけわが目のみ見る春のひるがた

南かぜ塵を上ぐればいみじかる初夏の日も灰色となる

たなばたの星も女ぞ汝をおきて頼む男はなしと待つらん

三十路しぬ妄想邪見ややふかくなるとも知らずたのまる君に

よき事に何をえらぶぞ君を見てあらむ命のつづくをえらぶ

ささらぎの雨となるともきさらぎの雪となるとも寢てあり給へ

少女子の遺羽子の音久方の照日の神も佐保姫もきく

いまはしく指のきたなき彼の座頭變化のごと
し曲彈をする

京の子の小肩をこえてちる時に板屋紅葉は匂
やかに見ゆ

彼の人にいたはられましこの人に小鳥の如く
養はれまし

鉢のもゝ一尺ばかり紅く這ふ花ゐんどうの薄
あかりかな

あら磯の犬吠岬のしぶきをば肩より浴びてぬ
れしかたびら

いにしへのさびしき人もかくしけん蓬生に居
て大空を見る

わが脛に知らぬ男の足觸れし驚きをして泥を
憎みぬ

くるくると器械まはれば黄なる埴鉢のかたち
すあぢきなきかな

春くれば古きすだれも夕雲のにほへるまへに
そよぎこそすれ

近き日に何の來るをゆめみけん十とせのまへ
のうつしゑの人

むらさきの帳を背にして獨居ぬ飽くなき心す
こし鎮まれ

たそがれの硝子障子に映りたる濡れし鬱金の
ひともと銀杏

蟪蛄の音よ平野次郎が獄屋にて彈きたる紙の
琴に似るかな

生れ來て一萬日の日を見つつなほ自らをたの
みかねつも

大いなるツァラッストラの蔑みし女の中にわ
れもあるかな

驚きて黑き瞳をわれ見はるツァラストラに耳
を貸しつつ

金の蛇ここちよきかな身を咬みぬツァラッス
トラの杖を離れて

板屋根を野分の颱の剝ぎしより空の覗けるあ
ちきなき家

きのふけふ塵に染みたる糸くづと見るまで萩のあはれになりぬ

すすきより萩の花より何よりもわがまづぬる秋の露かな

あらむこと殘り少なきここちしぬ日のあかき書月しろき夜

沖つ風吹けばまたたく蠟の火にしづく散るなり江の島の洞

鵠の鳥かき消す如く立ち去れば小波もなき黄昏の海

病むわれのたよりなげにも歎く時かたへに慄ふ櫻草かな

十界に百界にまだ知らぬこと一つあるごとし
身ごもりしより

不可思議は天に二日のあるよりもわが體に鳴
る三つの心臓

この度は命あやふし母を燒く迦具土ふたりわ
が胎に居る

生きてまた歸らじとするわが車刑場に似る病
院の門

己が身をあとなく子等に食はれ去る蟲にひと
しき終ちかづく

男をば罵る彼等子を生まず命を賭けず暇ある
かな

大雪に枕するごと生きながら岩に入るごと白き病室

惡龍となりて苦み猪となりて啼かずば人の生み難きかな

親と子の戰ふはじめ悲しくも新しき世の生るはじめ

蛇の子に胎を裂かるゝ蛇の母そを冷たくも時の見つむる

胎の兒は母を嚙むなり影のごと無言の鬼の手をば振るたび

その母の骨ことごとく碎かるる苛責の中に健き子の啼く

あはれなる半死の母と息せざる兒と横たはる
薄暗き床

虚無を生む死を生むかかる大事をも夢とうつ
つの境にて聞く

死の海の黑める水へさかしまに落つるわが兒
の白きまぼろし

よわき兒は力およばず胎に死ぬ母と戰ひ姉と
たたかひ

あはれにも母の命に代る兒を器の如く木の箱
に入る

産のあと頭つめたく血の失せて氷の中の魚と
なりゆく

産屋なるわが枕邊に白く立つ大逆囚の十二の
柩

血に染める小き雙手に死にし兒がねむたき母
の目の皮を剝ぐ

間を置きて荒く皷弓を擦る如くうつろの胎の
更に痛みぬ

みづからを苦むるをば恥とせし我も苦む母の
習ひに

いでわが兒幸あれと先づ洗ふ母が身を裂く新
しき血に

母として女人の身をば裂ける血に清まらぬ世
はあらじとぞ思ふ

流れつゝ蘆の根などに寄る如く産屋に冷ゐて
衰へしわれ

打つ笞に血の走るまで糺されて悔いざりし如
蘇りきぬ

うばたまのわが洗ひ髪ちらし髪金の襖子にふ
るる初夏

開山の法師よりけにたふとばれ戀の話をきく
人となる

秋のかぜ口を窄めて噴水盤のうす紫の水を吹
くらん

たをやめの胡蝶の舞を見さしきて白き露臺の
雨を手に受く

をりをりに黄なる粉ちらす藪椿彼も泣くらん
醜き椿

水色の秋のあけぼの大海の眞白く塗れる船に
有らまし

澄みとほるあまき涙を海として黒髪をひく白
き魚われ

秋來りものに抗ふ心さへ薄紙の如濡れにける
かな

われ昔さびしき事を戀と云ひ樂しき事を死ぞ
と思ひし

かきつばたわれのやうなる氣隨者眉ひそめつ
つ人見るに似る

何の木か小枝がちなる影おとす寒き月夜の街の敷石

雲流るおほくの人に覗かれてはや書をする文の如くに

八月の雨ならばいとよからまし瀬の音なれば人のしのばゆ

ここちよく高く風鳴る一もとの槍のもとを歩むあかつき

おのれをば守る力のなきやから黒がねをもてよろへるやから

めづらかに怖しく將た嬉しかる男の息のひなげしの花

大きなる百合の落つるは艶めかし我のわかさの去るにくらべて

あながちに忍びて書きしあと見ればわが文ながら涙こぼるる

あかつきの竹にとまりて蟬なきぬわが鏡より出でし心地に

ひなげしの赤きと粗き矢がすりの御納戸うつる花皿の水

飾らざるわがまごころの素直さをあらはに人の覗くさびしさ

思へるは片戀ながら自らは塵もする忍じとなす人はよし

この内にメヅザの楯を入れおくと傍の樞を指さしぬわれ

わかみどり柳に隠れ手を拍てば男の覗く紺納簾かな

床几より足を垂れたる舞姫の前に絹ひく加茂川の水

寛弘の女房達に値すとしばしば聞けばそれもうとまし

薇薔咲きぬかつて夢寐にも知らざりし思ひごとする人のほとりに

ゆかしけれものの哀れを知る群に入れ餘されて過ぎし年頃

めでたきもいみじきことも知りながら君とあらむと思ふ欲勝つ

春風も冷く吹くは白蘭の花のあたりに黄なる香焚く

吾妹子がくるぶし痛む病ひして柱によればつばくらめ飛ぶ

わが前に入らひろげぬなつかしき茜もめんの大阪なまり

わが世をばよろこぶなりと風吹けば髪も柳もおなじこと云ふ

あけくれの鶯の聲きさらぎの春の面にうきぼりをする

旅にある君かへるよりまさること未だ知らざる身を祝ふかな

青き木よいつまで立つぞ青き木は枯れし木よりも傷ましきかな

常磐津の連中ほむる姉たちの知らぬ文書くふところ紙に

男衆にふところ手してもの云へるうき人に逢ふ初日の樂屋

木戸へ行く茶屋の草履にうち水のしぶきのかかる夕月夜かな

一しきり花豌豆の風おくる涼風ふきて廊のくれゆく

何ごとに思ひ入りたる白露ぞ高き枝よりわな
なきてちる

あるかぎりことをこのめる中に居てひとりす
なほに戀もつくりぬ

時にふと思ひせまりて息つくも十とせに餘る
われのならはし

若き日は盡きんとぞする平らなる野のにはか
にも海に入るごと

契らねど衰へは來ぬ何となきうらはかなきを
われに知らせて

吉原の火事のあかりを人あまた見る夜のまち
の青柳の枝

蝶ひとつ土ぼこりより現はれて前に舞ふ時君
をおもひぬ

水草に風の吹く時緋目高は燒けたる釘のここ
ちして散る

棕梠の葉のみづから高き悲しさよ小草の知ら
ぬ風にはためく

草もなき赤土原の干割れしを越ゑて簾に上る
夏の日

棕梠の葉も蓬の莖もをちかたに雷鳴れば砂を
こぼしぬ

辻ごとに黑き服着る旗振が電車に載せて夏を
撒くらん

鰭などの暑き干潟にのこされて死を待つばかり寢ぐるしき床

かずかずの心の難に勝ちし身も疲せて細りぬ夏の來れば

わが知らぬ砂漠の風の身を吹くと夏を歎ちぬ草のいきれに

日のささぬ蔭にわが子を寢さすれば足の方より晝も蚊の鳴く

射干の赤き花より油ぎる蜥蜴の背より夏のひろがる

齒きしりをする子の如く夜の樹にぎと短くも啼きて止む蟬

わが嫌ふ男ならねど夏こそは深くあくどくい
と苦しけれ

小き文肱におさへて云ふことのよし惡心のこ
のうつはもの

わがつねに心に覗く洞穴を出しが如き黒き蝶
かな

こほろぎは床下に來て啼く時にちちこひしな
どおどけごと云ふ

杖などを髪の如くにうち亂し流るる木あり大
河の雨

人並に父母を持つ身のやうにわがふるさとを
とひ給ふかな

自らを淡き黄色にかはりゆく秋の草とも思ひ
なすかな

かしこさよ御裳裾川の板橋をわが踏む音のこ
だまする朝（以下八首伊勢志摩に遊びて）

天てらす神の御馬にわが子等が豆を食まする
朝霧の中

夕月のひかりの如くめでたきは木立の中の月
讀の宮

祈らくは豊宇氣の神貧しかる我等が子にも糧
を足らしめ

曇りたる沖をながめて涙おつ心さびしや伊勢
の海邊に

ものふりし鏡ならねで靜かにも二見の浦は雨に曇りぬ

少女子の櫛笥の中を見るごとく小船のならぶ鳥羽の川かな

出で行くや港に入るや知りがたし島づたひする阿房人の船

かりそめの物語より涙おつ病めども心をどる人かな

をりをりに心の夢をくらくする雲の陰影あり秋の日の如

荒縄のたすきをしたる門ばしら撫でてくぐれば雨がへる鳴く

こすもすと紅きだりあと雨に濡るみだれしま
まに刈らぬ草むら

幾とせも仰がでありし心地しぬ翡翠の色の初
秋の空

毛氈のはねず色をば木の下の床几に敷けば蜩
の啼く

あたたかき砂を手に載せうつつなく語れる人
に馴れてよる鵠

簑を着て圖書館まへの大河を船人のぼる水無
月の雨

戀をしぬ日毎忘れず泣きうべき身にしむこと
を君に聞かむと

流俗とたたかひ番ふ日とならばこの超人とともに勝たまし

春過ぎて木蔭に小く咲きいでぬ末の子に似る山吹の花

二月の朝鴉啼くみやしろの青き瓦にあられふるとき

わが閨の朝日に似たる紅硝子窓にはりたる山の馬車かな

黒き雲愛宕の山の上にいで人おびやかす秋のゆふぐれ

世につかず人を頼まずありてさへわれあさましと見る日もありぬ

一切をやや明かに見透す日われに來りて物足らぬかな

蜘蛛の巣にしら露おきぬ二三本竹のなびくも藪ごこちする

秋の風かの來るとき戀ざめのくらき冷き顏見ゆる風

かなしくもわが子の指にはさみたる蝶の羽よりの白き粉のちる

腹立ちて炭まきちらす三つの子をなすにまかせてうぐひすを聞く

若き人年を知れるとややたけて年忘るるといづれもよろし

もの書きぬうす手の玻璃に萎れたる黒きだり
あをかたはらにして

そぞろなる夜の心にうかび來るだりあの花は
わりなかりけれ

なほいまだ若きよはひを惜しとしぬ戀するこ
ともこの心のみ

風吹けど花みじろがぬうす紅の椿はかなしわ
が墓のごと

今ひとたびわれを忘るる日はなきや親のいさ
めし戀の如くに

君たちの知らぬ國よりわれ來ぬと云ふべきこ
とを今は言はまし

秋が着る素足のすその裏葉色清らにつづく廊を行く

初秋のあらしの中にうなづきぬ孟宗竹の黄なる末など

かぶと蟲玉蟲などを子等が捕る楠の木立の初秋の風

ひんがしの國のならひに死ぬことを譽むるは悲し譽めざれば惡し（以下輓歌十三首）

勇しき佐久間大尉とその部下は海國の子にたがはずて死ぬ

瓦斯に醉ひ息ぐるしとも記しおく沈みし艇の司令塔にて

大君の潜航艇をかなしみぬ十尋の底の臨終に
も猶

武夫のこころ放たず海底の船にありても事と
りて死ぬ

海底の水の明りに認めし永き別れのますら男
の文

水漬きつつ電燈きねぬ眞黑なる十尋の底の海
の冷たさ

海底に死は今せまる夜の零時船の武夫ころも
濕ふ

大君の御名は呼べどもあな苦し沈みし船に惡
しき瓦斯吸ふ

いたましき艇長の文ますら男のむくろ載せたる船あがりきぬ

やごとなき大和だましひある人は夜の海底に書置を書く

海に入り歸りこぬ人十四人いまも悲しき武夫の道

髮白き生田小金次先生は佐久間を語り春の日も泣く

○

いつしかと若き心にまかせたる身は三十になりぬあさまし

うらさびし圓覺寺にて摘みし花かざせしままに君と歩めば

錫となり銀となりうす赤きあかざの原を水のながるる

羽負ひて登天の日のここちする小雨まじりの初夏の風

初夏のあかるき緑やはらかにわが病む床のしら布を吹く

ほのかなる紅絹の色かな夜に祈るギリシヤ教の寺の灯の如

切岸を雨にすべりて洲に立てる秋の雑木もあはれなるかな

衰へと云ふこの報ひうくるより苦しきはなし戀の終りに

新しきわが生涯をきづくとて心にたてし圓ば
しらかな

ふきあげの盤よりなびく水の音靜なるこそ悲
しかりけれ

幽靈はまだ消えずやとうつぶしの稚兒輪が云
ひぬ島田の膝に

悲しさをまぎらはさんとくだものの皮むく七
間の白き指かな

うつむきて六二の桝にもの書けばかのさじき
より人のどよめく

○秋の夜の灯かげに一人もの縫へば小き虫のこ
こちこそすれ

馬上より垣の柳を人摘みぬ駿馬の骨を摘めと
云はまし

木蓮のしろき花びら物とせず憎げに散す瑠璃
色の蜂

何にてもわらばで其れに縋るべき弱き心を十
年鞭うつ

わが生みし第一の子は病みがちに清く細りぬ
天の身ならん

かき抱きともに玉とも變るべき不思議は無き
か此子死なさじ

病むを見て子に謙る親ごころ懺悔の如き涙な
がるる

代れるか親の受くべき禍に我兒は病みて清く
痩せゆく

清らにも我兒の病める悲しさよ水の底なる月
のここちに

さし覗きこの兒死なんと咽びけり病みてあは
れに痩せし寢姿

手にとれば青玉をもて刻まれし虫のここちに
青きすいつちよ

鎌の刄のしろく光ればきりぎりす茅萱を去り
て蓬生に啼く

大世界あをき空より來るごと蕾をつけぬ春の
木蓮

秋の島奥の方より水はこぶ白き桶などここち
よきかな

秋の日の夕となればわがうれひ君がこころに
まつはりて這ふ

魚市のかがりの煙更けし夜の港になびき白き
露ふる

天王寺田舎の人の一つ撞く鐘の下より涼かせ
の吹く

狂亂に近づくわれを恐るるや蝶もとび去る髪
をかすめて

なでしこの花咲く頃となりぬれば人目をしの
び文書くわれは

二つ三つ忘られぬこと書きこして心の上を走り行く人

渚なる廢れし船に水みちて白くうつれる初秋の空

指をもて濶き空にや書きすてんこの國の人忌むと云ふなり

冬の手に裂かれて落つる金の箔ひと葉ちるなり二葉ちるなり

東大寺二王の門を靜かなるうす墨色にぬらす秋雨

人のする初戀などもとまり秋はものみな哀れなるかな

一二〇

生きながら身の棄てらるる心地しぬ岩代山の
雪よけの底（以下三十三首岩代に遊びて）

雪よけの板屋くづれて草の葉の裏ひるがへり
山の雨ふる

磐梯の山をとどろと鳴し來てみづうみに入る
白き横雨

山潟の驛にわが見るみづうみは譬へば白き肘
の片はし

岩こゞて三筋に裂くる白き瀑とどろと鳴りて
山に霧ふる

ひと時も千とせもなしと敎へ居る琅玕洞の水
の音かな

湯上川ここに日を經へば衰へて身を隱すとや人
の云はまし

人言はさもあらばあれ湯を愛でてさもあらば
あれ山に日を經る

初秋の湯上の山の朝風に水を過りて雲のふか
るる

わが背子と夏の旅路にやつれ來て今日みそぎ
する岩代の山

みづからを山の湯ぶねに朝くだる白き雲かと
驚きぬわれ

美くしや會津の山の湯上川ちさき板橋ちさき

舞姫

みやびをとたわやめのみの渡る橋宿屋の門に
ひとつある橋

湯上川たかき欄を背にしてつづみの紐をむす
ぶ舞姫

山あひに管玉などを置くと見る湯上の川の瑠
璃色の底

湯あみしてやがて出じとわが思ふ會津の庄の
ひがし山かな

半身を湯より出して見まもりぬ白沫たてる山
あひの川

自らを清しとすれど猶あかず會津の山の湯を
愛でて浴ぶ

川底のろくしやう色の板岩に白き裳引きて躍る水かな

谷底の湯槽に近く鳴る水を遊べる魚のここちして聽く

ましろなるわが身をめぐり湯の湧けばいかづち伏せてあるここちする

憎くげなし湯槽にとなるあなぐらに似る小座敷の三味線の音

あけがたの山の巖間の湯にあれば近き雲より小雨そぼふる

渓川の岩のくぼみの水だまり星座のごとく見ゆる朝かな

山の雨ころもを濡し葛の花人にまどひぬあか
つきの谷

花かざし今水姫があそびごとする灯の川とな
りにけるかな

山黒く暮るれば谷の二側に白き流れをてらす
ともし灯

湯上川わが今日おとす美くしき涙もまじる水
の音かな

飯阪のはりがね橋にしづくしる吾妻の山の水
いろの風

吾妻山うすく煙りて水色す摺上川の白きあな
たに

わが浸る寒水石の湯槽にも月のさし入る飯阪の里

山の湯にわが圓肩のうつれるをしろき月夜と思ひけるかな

山の湯に浸りて何を思へるやなほ美くしき戀を思へる

煤びたる太き柱に吊りわたす蚊帳に入りくる氷の音かな

見つつなほものの哀れなる日もありぬ逢はで氣あがる日もありぬわれ

元朝やわか水つかふ戸に近き柳の花に淡雪ぞふる

おさへ居し手のひらぬけて五つ六つ目の前に
舞ふかなしみの蝶

草の庭まへに見ながら飯を食ふ男おもひぬ逢
ひにこぬ時

世に知らぬ千年の寒さ身を嚙みぬわが肱まげ
てひとり寝る床

麥の穂の黄ばめる上にものの葉の裏見るごと
き海の色かな

いづ邊へか行き隱れんと思ふこと瘧病のごと
くなほする

たのしみのまた來る日をあたへよと訴へぬ子
は衰へにけん

夏となり銀のとんぼの飛びくれば忘るる日なしかの人のこと

あな涼し大雨の中の木立をばわれの心のはしり行く音

折ふしに悪をほどこす心などわが未の世にをかしからまし

芝居よりかへれば君が文つきぬわが世もたのしかくの如くば

水無月の夜にして早も啼く虫のやさしき聲のうすみどり色

藤の花わが手にひけばこぼれたりたよりなき身の二人ある如

自らを先づ驚かすことするとこの衰へをつく
るならねど

足らぬこと無しと知れども涙おつうらはかな
さや病ならまし

剝がれたる木の皮などの泣く音かと木立の蟬
をかなしめるかな

小蒸汽が橋の下にて笛吹くも物のはずみに泣
かまほしけれ

棕梠の花魚の卵の如きをばうす黄にちらし五
月雨ぞふる

わが背子が行く日近づく海こえて若しかへら
ずばかなしからまし

海こゐて所さだめずわが背子と流れて遊ぶ身
ともならまし

百舌鳥啼けば火のつく如く過失をせむる男の
こはき顔見ゆ

心臓にわが顔つけて吸ふは血か魔薬の液か熱
しくるほし

金屋に人なき時は春の日も秋にとなれる思ひ
こそすれ

かちわたり波かしきたり足もじる危ききはに
夕風ぞ吹く

うき草の中より魚のいづるごと夏木立をば上
りくる月

烏瓜たよりなげなる青き實の一つかかるもさびしきものを

せはしげに金のとんぼのとびかへる空ひややかに日のくれて行く

黑馬のながく伸せる首すぢのつやつやとして萱の露ちる

大和川砂にわたせる板橋を遠くおもへと月見草咲く

われ早く重きいかりを身におひぬ樂しき戀の底にしづめと

大空にあそぶが如く折折に虛無に羽搏てば健きかなわれ

初秋の一重の衣涼やかに風の通るも戀に似るかな

かの刹那この刹那いとおもしろくいと狂ほしくいと悲しけれ

夜もなほ籠のあたりに灯をおけば金絲雀は啼く旅人のごと

七尺の簾を透きて白百合のそよぐ夕にわたるいなづま

狂ほしき黑髪をもて絡みたる心の巣より紅き鳥啼く

腕をみづから枕きて雪山の流れと聞くもここちよきかな

ものの蔓あかざまじりに枯殊る築土の内のたんぽぽの花

光氏が淺草寺の檐したに袂をしぼる水無月の雨

ひと時の盛りと云はむ中にあり世をみな夢と思ふたぐひに

朝夕こころにみたずと思ふこと多くなれるもおとろへしゆゑ

戀人ともの云ふ如く立ちながら手ずさびに引く青柳の糸

店さきに住吉をどり傘の柄を叩く音より夏のひろがる

わが姿いまだ人見ず火の柱のみ見ゆと云ふあさましきかな

ある人もある書も皆華やかに戀をとりなしわれを敎へし

さし櫛はおちて後に音たてぬ心に代り高く泣くらん

知恩院の高き屋根よりわが髪に皐月のしづく青やかにちる

街々はうす黄の菊のさびしさに早くも似たり十月の末

自らをもて證さんと思ひ立ち寒き不思議に入りにけるかな

いかばかり光る玉ともわれ知らず人採らば採れ人棄てば棄て

紙を切る細き刀物も何となくすさまじきかな夜を一人居て

戀さへもわがなすさきに飽きたらぬ心の奥の心としりぬ

かの人にかかはりなづむ心をば今知るがごと頬の染まるかな

青玉の涙ながれて川盡きずわれは其處より棹さしてきぬ

雨白く土をあらへば瀨戸かけの藍の模樣のひかる夕ぐれ

杏の實うすく赤める木の下に砂を流せるあけ
がたの雨

ともすれば久しく座して思ふこと青き御空の
額に落ちこと

あめつちを生の親とも云はずして夜晝におも
ふ山のおくつき

君やがて草踏む靴の寒げなる音を憎みてかへ
りこしかな

明星も白き小石にしかめやと手のひらに置き
かたらふ夕

戀をわれ斷ち易き火とおもはねど抱きつつ吹
く身のこぐるまで

うす赤きすゐいとびいの花の呼吸湯氣より熱
きこちするかな

夕ぐれの夕ぐれのかの笛の聲ほどふるままに
わりなく戀し

ひと時にわかき命を燒きつくせ斯く呼ばはり
て行くにかあらん

高き屋に朝々のぼり遠かたの木蓮の花見る日
となりぬ

吹き來り室に入る時秋の風わが面見てあな寒
むと云ふ

秋の來てとうしみとんぼ物思ふわが身のごと
く細り行くかな

しろき月木立にありぬうらわかき男の顔のぬ
れし心地に

かば色のつやよく長き頸のべて麒麟の食める
あかしあの花

小き手を横に目にあて泣く時はわが兒なれど
も清しうつくし

あぢきなく石につまづく心地して俄かに切れ
し三味の絃かな

青磁の器水たたへたりわれ死にて行く國浮ぶ
ここちこそすれ

あなさびしこの邊には人なきか人はあれども
未だ夜明けず

飽くをもて戀の終と思ひしに此さびしさも戀
のつづきぞ

娘にてこころに得たる病より痩せの癒わざる
憂身なるかな

筆とれば涙おちきぬ指痩せてふるるに似たり
枯木と枯木

前髪を焔のごとくちぢらせぬ戀にかかはる執
着のため

水色の朝顔に似て板敷のつやにうつれるわが
たもとかな

この國のはてをさまよふこころすれ旅人おく
り京にきつれば

相あるを天變さとし人騒ぎ君は泣く泣く海わ
たりけん

とく消にぬ人ねたまずや大船に二人乗れりと
思ひし夢も

片ときも立ちはなれずてならひしは昨日のわ
が世こし方のこと

君行きてたのもしげなくなりつると心みづか
ら蔑むはわれ

いと重き病するなりわが心君ありし日におも
ひくらべて

ねがはくば君かへるまで石としてわれ眠らし
めメヅザの神よ

一人行くを深き心のある人と君をたたへぬゆるすべからず

しろがねの小き蛇が夜も晝も追ふべき君が大海の船

逢見ねば黄泉ともおもふ遠方へたからの君をなどやりにけん

わが起居涙がちにてあることも旅なる人の皆しれること

憂ふるやはたよろこぶやわが君にかかはることのいと遙かなる

おのれこそ旅ごこちすれ一人居る晝のはかなさ夜のあぢきなさ

月たたば日へなば妬き話さへもり聞くべしと
はかなまれつつ

海こねんいざや心にあらぬ日を送らぬ人とわ
れならんため

人皆がかしこまりおき居ずなりし彼の船室の
一二分ほど

おもひそふ湖北漢朝元年の支那にて書ける君
が消息

一人てふならはぬここち今日になるするがか
なしさかぎり知られず

あぢきなく弱きかたへと日にすすむ心と知れ
どとらへかねつも

今すこし人にかへらば子等などもなだめんと
思ふいとわろしかし

おなじ世のことは何のはしにさへ思はれが
たき日をも見るかな

ただ一目君見んことをいのちにて日の行くこ
とを急ぐなりけり

戀と云へどあなどりやすき方まじり殘されに
けん一人行きけん

あぢきなくものの哀れなりわがままに誇りなら
ひし戀のこころも

君こひし寢てもさめてもくろ髪を梳きても筆
の柄をながめても

幸の全からざるくやしさを思へる人と云ふに
かあらん

わが男ひとへにたのむ衰れさのこの頃となり
あからさまなる

こし方は心にふかくしまざりしことならんな
ど戀のおもはる

その妻をいひがひなしと憎みつつ罵りつつも
歸りこよかし

わが前に灰いろの幕ひかれたり除かるる日の
ありやあらずや

十歳の子と一人の母とたぐひなく頼みかはす
も君あらぬため

ありし人面かげ忘れがたきより住む家をさへ
つらく覺ゆる

うらめしと思ふ心もうちかへし音にぞ泣かる
る逢ふすべなさに

心からもてそこなへる身のはてと病めるを悔
いぬ逢はで死ぬべき

われ泣くと遠方にある人なればさしてたしか
に知るにもあらず

あな戀しうち捨てられし恨みなどものの數に
もあらぬものから

はれやかに人目ばかりをもてなしてある人に
さへならふすべなし

盗みもて行かまほしげにひと一人思へりつる
も憎からぬかな

さびしさも憂きもさすがにさりげなく書く文
ながら見ては泣くらん

身も人もいのちの堪へずなりたらば哀れなら
まし遠く別れて

待つべしとなだらかに云ひ君やりし人ともあ
らず狂ほしきかな

○筆とればまたわが心やるせなく騒ぎそめたり
文かかで寝む

ものおもひ絶えぬ身なりやその涙熱きつめた
き何方にせよ

子等を率て家うつりすれ君なくてさすらひ人
となりにけるかな

はて近き世界の如く空も見ゆわが身につけて
思ふなるらし

思へどもわが思へどもとこしへに歸りこずや
と心みだるる

われながらあなづらはしく思ふかな巴里の大
路を君一人行く

紫の衣など見れば束のまは變れる身とも思は
れずして

年ふれどつゆゆるびなきなからひと我も許し
つ彼の昨日まで

十餘年またなく君のおもへりし我をみづから
かたみとぞ見ん

うちそひて巴里のあたりの旅人と呼ばれまし
かばあらめ生がひ

旅をするよろこびなども聞きなましながらへ
ましとかつ思へども

よそものに君をなすとは思はねど唯見がたき
があさましくして

君行きて身内の熱の皆さめしここちも覺にも
ゆるを覺ね

わかれ住むかかる苦しさならはでもあらまし
ものをうつそみの世に

いとかなしうるみ濁れるわが息の籠れる間よ
り見ゆる大ぞら

やすみなく火の心もて戀ふるなるわれにいつ
しか君飽きぬらむ

また君を見てかたらはん時のいと長きおそれ
に病するかな

横たはるけものの如く一とせを思へるままに
今日か死ぬらん

海こねし旅人の文時をりになげきの家の窓あ
けに來る

一人居て聞くときさびしうら若き平野萬里の
支那の話も

わが机死のまぢかにもある如くよれば夜も日
も涙ながれぬ

客人達哀れは知らぬにもあらず時をたのめと
をしふる如し

悲しくも君と別れし海の波音すれ病めるわが
枕上

何ものか心の闇をてらす時またかへりこん君
としおもふ

風のごとすと行く君に死ぬべしと慄へて云ひ
ぬ夢のさめぎは

うとましく敵の如く手にとりぬ一人寢の床に
おつるさし櫛

男をば目はなつまじきものとする卑しきこと
は思ほへなくに

一八〇

青海波 終

明治四十五年一月二十日印刷
明治四十五年一月廿三日發行

青海波
正價金壹圓

著作者 東京市麹町區中六番町 與謝野晶子
發行者 東京市本郷區本郷四丁目八番地 阿部幸作
印刷者 東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地 今井鐵次郎
發行所 東京市本郷區本郷四丁目八番地 有朋舘 電話下谷八一六 振替口座一四五三二